

授業作り	重 点	・「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、各教科において ICT 機器も活用しながら、双方向のコミュニケーションのある授業を目指す。 ・授業を通して、児童が夢中になって学びの対象に関わり、「聴く」こと、「考える」こと、「表現する」ことの3つに重点をおきながら、自分の考えをもつことができる授業づくりを目指す。	中 間 評 価	・ICT を活用して授業を行う時間が増えている。教員主導での活用がまだまだ多いため、e ラーニングサービスを活用した協働学習の実施に努める。 ・「聴く」こと、「考える」ことについては、各学年で授業実践により、自分の考えをもてるような場面設定を継続して作れるようにする。	最 終 評 価	・e ラーニングサービスを活用した協働学習の取組の充実は、今後 も課題である。 ・自分の考えをもつ授業づくりは、ミライシードやオクリンクを活用して、自分の考えを表出する授業づくりに挑戦する教員が増えているので、今後も継続していく。
環境作り		・クラスの中で、一人ひとりの児童が安心感と他者への信頼を実感できる学級経営を目指す。 ・児童にとって見通しのもてる授業設計と、それを可能にする教室環境（ユニバーサルデザインの視点）を整備する。		・個別の課題に応じることで、引き続き、一人ひとりが安心できる学習の実施に取り組む。 ・身に付ける力を明確にし、そのための取組を意識した授業設計を行うとともに、学んだ履歴を残すよう振り返り活動に力を入れていく。		・一人ひとりの児童が安心感をもてるよう個に応じた指導を各学年・学級で取り組めている。学習の定着度には個人差があるので、次年度への引継ぎを確実に行う。 ・めあてを意識した授業づくりが実現できるよう継続していく。キャリアパスポートを活用するなど、自らの学習の振り返り活動が定着できるよう努めている。

■ 学年の取組内容

学年	教科	学習状況の分析（10 月）	課 題（10 月）	改善のための取組（10 月）	最終評価（2 月）
1	国語	学平仮名や片仮名については、正しい読み書きができるようになってきた。長音、拗音、促音、撥音、助詞の「は」、「へ」及び「を」を文の中で正しく使うことや原稿用紙の使い方については誤りがあり、まだ十分に身に付いていない状況である。 学姿勢を正しくすること、「話し方名人」を意識することができており、はっきりした発音で話す習慣が身に付いている。一方、「聞く」力に課題のある児童がいる。 学本や文章を楽しんだり、想像を広げたりしながら読むことができています。一方、多くの児童が「文章を書くこと」に課題がある。	・正しい文字の形を捉えて書くことや正しい筆順で書く意識をはぐくむとともに、長音、促音、拗音、撥音、助詞の使い方や片仮名が正しく読み書きできるよう指導する必要がある。 ・大事なことを落とさないようにしながら、興味をもって聞くことができるよう指導する必要がある。 ・経験したことや想像したことなどから書くことを決め、書こうとする題材に必要な事柄を集めることができるよう指導する必要がある。	・日常的に書く活動を取り入れたり、「しゃ・しゅ・しょ かるた」を行ったり、ワークシートを使ったりするなど、正しい文字を書くための練習を行う。また、授業中やテストの時に見直しの習慣を身に付けさせ、年度末までに全員が正しい文字を9割以上書けるように繰り返し指導する。 ・「聞く」力を高めるために、毎日の朝のスピーチや帰りの会で「いいところ発表会」を行う。「話を聞く」時間を適切に設ける。 ・書こうとする題材に対して、必要な事柄を集めることができるようにワークシートを工夫し、年度末までに全員が「1年生の思い出」の題材で300字程度の作文を書けるようにする。	・国語や特別の教科 道徳、生活の授業や学年行事、学校行事などの活動後に、感想を書き、記録する活動を継続して行った結果、8割以上が長音、促音、拗音、撥音、助詞の使い方や片仮名を正しく読み書きできるようになった。漢字の学習ではタブレット端末のデジタルドリルを活用し、正しい筆順を学習させることができた。 ・日々の授業やスピーチ、発表会、行事、百人一首などで、「指示を聞く」「友達の話聴く」「耳を澄ませる」といった経験を重ねた。その結果、「大事なことを落とさないように聞く」ことができるようになった児童が8割以上になった。今後も継続して聞く力を付ける指導をしていく必要がある。 ・運動会や遠足の振り返りで定期的に作文を書かせた結果、全員が「1年生の思い出」の題材で300字程度の作文を書けるようになった。書くことに苦手意識のある児童には、引き続き個別支援を行う。
	算数	学加法や減法の計算は個人差があり、指導が必要である。問題文において演算を決定する力がまだ十分に身に付いていない状況である。 学「どちらがおおい」「かたちあそび」の学習では、直接操作する活動を通して、比べることの理解が深まり、量感が育ったが、その場限りの学習で忘れてしまい、まだ十分身に付いていない状況である。	・加法、減法が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりすることができるよう指導する必要がある。 ・日常生活でも、さらに量感を育てるための経験ができるよう指導する必要がある。	・問題文において「演算を決定する」能力を伸ばすために、自分で文章題を作るなどして加法、減法が用いられる場面を想像したり、言語化したりする。実生活に結び付けた学習活動の時間を適切に設ける。 ・日常生活の中で、児童の量感を育てることができるよう、具体物の操作によって直接比べる体験活動の時間を適切に設ける。	・タブレット端末のデジタルドリルを活用し、繰り返し問題文を解いたり、自分で文章問題を作ったりする活動を行ったことで、演算を決定する能力や文章問題を解く力を伸ばすことができた。 ・学習内容の定着を図るために、今後も実生活に結び付けた学習活動を取り入れていく必要がある。 ・具体物（算数ブロック・おはじき・数え棒）を使った学習と、動画教材を取り入れることで、理解が深まった。算数の時間だけではなく、生活科、学級活動での係活動の時間、お楽しみ会の準備の中で、担任が日常的に「長さ」「形」を意識させることで、算数で学んだ学習内容のさらなる定着を図っていく必要がある。

学年	教科	学習状況の分析（４月）	課 題（４月）	改善のための取組（４月）	中間評価・追加する取組（10月）	最終評価（２月）
2	国語	学平仮名や片仮名については、正しい読み書きができるようになってきた。拗音や濁音については、個人差がある。 学提出される課題やワークテストの状況を見ると、漢字の書き取りや書き順について誤りがあり、まだ十分身に付いていない状況である。 学姿勢を正しくすること、相手を見て話を聞くこと、話の内容を聞き取り行動することができるようにする。	・日常生活において、相手に自分の考えを的確に伝えるために、促音、拗音、片仮名の読み書きが正しくできるようになる必要がある。 ・読み書きができるようにするために、正しい文字の形を捉えて書くことや正しい筆順で書く意識を形成する必要がある。 ・実生活の場面において、分かりやすく伝えるために、「話す」の基本的な習慣とルールを身に付けることが必要である。	・正しく読み書きができるようにするために本をたくさん読むことを推奨し、正しい言葉に触れる機会を増やしていく。朝の時間や学習の導入の時間など、季節を表す言葉や日付を表す言葉などに触れる時間を適宜設け、正しい言葉や文字に触れる機会を増やしていく。 ・国語ノートや漢字ドリルを活用して、丁寧に書くよう、正しい筆順や文字の形をきめ細やかに指導する。プリントやタブレット端末を活用して、繰り返し練習させたり、定期的に小テストを行ったりして、定着を図る。 ・実生活の場面において、話の内容を理解できたか振り返る時間をこまめに設定していく。朝の会などにスピーチを取り入れ、話すことや、友達の話聞くことの経験を増やし、定着を図る。	・朝の時間や学習の導入で季節を表す言葉や日付を表す言葉に触れる時間を適宜設け、正しい言葉や文字を学習することができた。読書や音読、群読を取り入れたことで、読みの力が定着した。書きについては、国語の単元「おもちゃの作り方をせつめいしよう」や「お話の作者になろう」を活用して、文章の書き方について指導していく必要がある。 ・国語ノートや漢字ドリルを活用して、丁寧に書くことを指導してきたため、正しい文字の形を捉えて書くことができるようになった。筆順については、タブレット端末を使用しながら丁寧に指導していく必要がある。 ・国語「あったらいいな、こんなもの」の学習では、一人一人が、話すこと・聞くことについての基本的な習慣を身に付けることができた。日常的にスピーチの場を設け、指導していく必要がある。	・促音、拗音、片仮名の読み書きの定着を図るため、タブレット端末やプリント、ノートを使って、日常的に指導を続けた。特に、自分が書いたものを自分で読み直しをし、推敲する経験を積ませることで、正しく読み書きできることが増えてきた。 ・書写の教科書や漢字スキル、タブレット端末を活用しながら、正しい文字の書き方や漢字の読み書きの習得に努めた。間違いやすいところやポイントを一つ一つ丁寧に説明しながら練習することで、正しく丁寧に書こうとする意識付けを行うことができた。 ・帰りの会で話す機会を設けたり、話型を用いたりすることで、話すことへの抵抗を少なくするよう努めた。自由に話すことは好きであるが、改まった場や形式で話すことについては、今後も継続して指導していく必要がある。
	算数	学加法や減法の計算の定着には、個人差がある。 学「どちらがおおい」「大きな数」「ひろさ」の学習では、直接操作する活動を通して、比べることの理解が深まり、量感が育った。	・加法と減法の計算を学習後、定着のために補充問題をする必要がある。 ・数学的な表現を確実にするために、加法、減法が用いられる場面を式に表したり、場面を絵や図で表したりする必要がある。 ・日常生活でも、さらに量感を育てるための経験ができるようにするために、具体物の操作の指導が必要である。	・朝学習の時間や宿題で、計算ドリルやタブレット端末、プリントなどを活用し、繰り返し練習することで、定着を図る。 ・問題をしっかりと把握することができるように、言葉や数に注目させ、絵や図、式で表すことができるように段階を踏みながら丁寧に指導していく。 ・日常生活で目にしているものを授業でも取り上げ紹介したり、具体物を活用し、操作させたりしながら、理解を深める。	・朝学習や宿題で、計算ドリルやプリント、タブレット端末などで繰り返し練習し、加法や減法の定着を図ることができた。乗法でも繰り返し練習し、定着を図る必要がある。 ・問題文に線を引いて言葉や数に注目することで、正しく問題文を捉え、立式できるようになった。 ・「長さ」や「かさ」の学習では、具体物を活用し、量感を育てることができた。	・加法、減法、乗法が用いられる場面の文章題を自分で作る活動を通して、数学的な表現が少しずつ身に付いてきた。友達の作った問題を解くことで意欲的に練習問題に取り組むことができた。 ・4桁の数では半具体物を数えたり、1メートル物差しを使って実際の長さを測ったりするなどの操作活動を取り入れることで量感を養った。 ・3年生の学習内容を見越して、タブレット端末で九九や筆算などの計算練習に取り組ませた。九九は順番に唱えるだけでなく、ばらばらに聞かれても答えられるよう練習を重ねた。
3	国語	調新宿区学力定着度調査では、全体的に目標値を上回っているが、「書くこと」は全国平均を僅かに下回った。また、「文章を書く」は全国平均を下回った。 学姿勢を正しくすること、相手を見て話を聞くこと、大事なことを落とさずに聞き取ることができるようにする。	・相手が話していることを聞き、内容を理解する力を伸ばしていくことができるよう指導する必要がある。 ・カタカナで表すべき言葉を判断し表現できるよう指導する必要がある。	・スピーチを取り入れたり、話型を用いて人の前に立って丁寧に話したり、聞き取ったりする力が身に付くよう指導する。 ・様々な本や詩を授業の中で紹介し、朝読書や読書月間などで読書をする機会を設けるなどして、文や物語に触れる機会を設け語彙力を高める。	・物語「ちいちゃんのかげおくり」では、自分の感想を明確に表現するための言葉を選び、感想を書くことができた。 ・国語「もっと知りたい、友だちのこと」では、日常生活の中から話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選んでスピーチができた。相手を見て話したり聞いたりできるように指導する。	・今年度の新宿区学力定着度調査の結果では、書くことは新宿区平均を上回った。今後も自分の感想を書くことや文法に気を付けて書くことなどの指導を丁寧にを行うことで更に効果を上げたい。 ・相手意識をもって話す力を育成するために、タブレット端末を使い展覧会に出品した作品の紹介をする活動をした。オクリンクを活用することで自信をもって発表をすることができ、相手を見て話したり聞いたりできるようになった。
	算数	調新宿区学力定着度調査では、全体的に5ポイントほど目標値を上回った。「たし算」に関しては全国平均を2ポイントほど下回っている。 学タブレット端末を使った問題作りや、場面を式で表す指導を繰り返し行ったことで、7割程の児童がテープ図を使って問題場面を表し、正しく立式ができるようになった。しかし、文章題に出てくる数値を順番に立式すればよいと考える児童もいるので、問題場面を絵や図に表すなど、問われている内容を整理するための指導を継続する。	・繰り上がりのあるたし算を苦手としている児童が多い。授業場面では問題を解くことができても、テストや練習問題に取り組む際に、焦りなどからケアレスミスが目立つため、指導する必要がある。 ・リットルやセンチメートルなどのかさや長さの量感を具体的にイメージできるようにする必要がある。	・計算問題を解くときは、併せてたしかめ算をさせ答えが合っているか見直す習慣をつけるように指導していく。 ・量感を養うために授業で具体物を使用し、実際のかさや長さを体感し、それぞれの大きさをイメージできるような場面を設ける。	・筆算の際には、繰り上がり・繰り下がりを必ず書くように指導をし、慎重に計算をする習慣が身についた。しかし、問題文をよく読まずにミスをする児童が目立つので、問題場面をよく考えて立式するよう指導する必要がある。 ・「長さ」を学習する単元では、授業内で具体物を使用し児童それぞれで様々なものの長さを調べることで、量感をイメージすることができるようになった。	・今年度から始まった習熟度別少人数指導の結果、4月当初の課題の加法・減法のポイントは区平均まで追いつき成果は上がったと言える。しかし、算数が苦手な児童がいるので、放課後学習教室で習熟を行うことでさらなる定着も図っていく。 ・今後の算数でも単位換算に苦手意識が予想されるため、身の回りにあるものの特徴を量に着目して捉え、量の単位を用いて的確に表現することができるように指導する。

4	国語	【調】新宿区学力定着度調査では、全体的に目標値を上回ることができたが、「書くこと」の「指定した長さで文章を書く」の観点が平均値を下回っていた。 【学】学習の振り返りを書かせると 10 字程度しか書けない児童が複数名いる。	・限られた時間内で決められた字数を書くことができるようにする必要がある。 ・読み取りの自由記述等、内容をきちんと把握していないと解けない問題を繰り返し取り組む必要がある。	・毎日その日の振り返りを書くことで、書くことへの抵抗感を少なくし、書ける文量を多くしていく。 ・文章の型を揭示し、正しい文章の書き方を指導する。 ・これまでは3部構成を意識させていたが、今後は4部構成（起承転結）を意識して書かせる。 ・国語の授業で、要約の学習を積極的に取り入れ、意識して読み取りの練習をする。	・毎日、5分間で一日の振り返りを書く時間を継続したところ、7割程度の児童が、4月当初よりも一定時間に書くことができる分量が増えた。3割の児童は、能力のほかに、書く意欲が低下しているため、意欲付けをしていく必要がある。 ・手本を見て文章構成を学び、それに倣って文章を書くことで、4部構成の型を理解することができた。 ・要約は、常に意識的に取り組ませる必要がある。	・毎日の振り返りを継続して行ったところ、10月の時点より文章を書く量が増えた。また主述の関係を意識したり、接続語を積極的に使ったりする様子も見られ、意欲が低い児童は2割程度に減少した。 ・要約文を書かせる際に、一度きりの活動で終わるのではなく、練習と実践の段階に分けて取り組ませることで、7割程度の児童が自力で要約文を書けるようになった。また、タブレット端末を活用し文章を書く手助けとしたことで残りの児童も意欲的に取り組んでいた。
	算数	【調】新宿区学力定着度調査では、全体的に目標値を上回ることができたが、「10000より大きい数」の学習では個人の学習進度の違いにより点差が大きく開いてしまった。 【学】計算力が身についていない児童が学年を通して複数名いる。また場面を式に表したり、工夫して計算したりすることが苦手な児童はさらに多くなる。	・学習進度に差が出ないように課題提出を徹底する必要がある。 ・位を間違えず、基礎基本の四則演算を間違えないように計算できるようにする必要がある。	・朝学習で練習問題に取り組みその場で丸付け、解説をして繰り返し学習を進めていく。 ・必要に応じて放課後に個別に指導をし、四則演算等基礎基本を身に付けさせる時間を設ける。	・毎日、授業進度に合わせたタブレット端末での宿題に取り組ませた。回答率100%まで解くことを条件とし、ほぼ全員が達成している。 ・放課後学習教室の時間を活用し、授業の補充をしている。今後も継続し、底上げを図る。	・個々の課題を把握するために小テストを行い、結果に応じて少人数に分けた放課後学習に取り組ませたことで、定着が不十分な児童の点数を上げることができた。 ・四則演算を徹底して指導することで、学習意欲が高まり、主体的に四則演算に取り組む児童が増えた。
5	国語	【調】新宿区学力定着度調査では、全体的に目標値を上回ったが、昨年度と同様に「書くこと」は目標を下回った。また、読解に時間がかかり、書くことに時間を回せずに取り組めない児童も見られた。 【学】自分の考えや意見を発表する児童に限られており、積極的に自分の思いを表現する児童が少ない。	・書く力を高めるために、内容の中心を明確にしたうえで、自分の考えを積極的に言葉にできるようにする必要がある。また、時間配分の仕方についても指導が必要である。 ・自分の考えに自信がもてるようにしたり、自分の考えを文章に表す語彙力を身に付けたりする必要がある。	・国語の教科に限定せず、全教科を通して自分の意見をノートやワークシートに書く指導を行い、発表する機会を多く設ける。また、机間指導を行って、話し言葉で意見を引き出したり、出来ている児童の書いた意見を価値付けしたりする。 ・ペアやグループで発表する経験を増やし、自分の考えを発言することに自信をもてるようにしていく。	・自分の意見を書く機会を増やした結果、書くことに対して苦手意識が改善された児童が増えた。また、机間指導を通して引き出した意見を発表させることで、友達の見解を基に自分なりの意見をまとめられるようになった。 ・自分の考えに自信をもって発表できる児童が増えた一方で、変わらずに主体的に取り組めない児童がいる。引き続きペアやグループで話し合い、意見を交換し合う時間を設けるとともに、机間指導を通して自分の意見に自信をもたせる。	・教師や教科書の手本をもとに、自分なりに作文を書く練習を重ねたり、分からないところを質問したりすることで、書くことに粘り強く取り組めるようになった児童が増えた。また、友達と読み合うことで、よりよい書き方を交流し、次への意欲をもつことができた。 ・発問や展開を工夫し、児童が進んで「発表したい。」と思える授業づくりをした。ペアで意見を交換し合う時間には教師が入って、考えに価値づけを行うなどした。その結果、積極的に発言できるようになってきた。
	算数	【調】新宿区学力定着度調査では、全体的に目標値を上回ったが、「データの活用」「折れ線グラフ」は目標を下回った。一方で、「変化と関係」「簡単な場合についての割合」は10.7ポイント、「角の大きさ」は10ポイント目標より上回っている。 【学】指示がないとノートを取ることができない、題意を把握できずに固まってしまうなど細かな支援を必要とする児童がいる。	・基本的な計算の仕方は身に付いているが、解き終わった後に見直す習慣を定着させる必要がある。また、単純な計算だけではなく、応用問題に取り組む機会を増やす必要がある。 ・I C T機器を用いたり、大切なことをカードに書いたりするなど、視覚的にとらえやすいよう指導をする必要がある。	・日頃の学習でも、見直しが習慣化するように声をかけていく。また、社会や理科など、他教科でデータやグラフの活用する場面を通して、力をつける。 ・新しい単元の学習前に既習内容の時間を取ることで基本的な知識・技能を身に付けさせる。また、つまづきのある児童には、放課後学習など補充学習を利用して指導する。	・見直しの習慣化に向けて、今後も常に引き続き指導していく必要がある。また、応用問題に挑戦しようとする姿勢は見られるようになってきたので、今後は文章題の正答率が上がるように、単元ごとに図や簡単な解き方を使えるように引き続き指導を行う。 ・I C Tで動的に示したり、色で重要度を示したり、図示して解説したりすることで、題意を理解して問題に取り組むことができるようになった。	・「帯グラフと円グラフ」の学習だけでなく、社会科や国語科、総合的な学習の時間の調べ学習などで、日常的にデータやグラフなどの資料の活用を行った。その結果、データやグラフの読み取りに慣れ、自分でもまとめる力がついてきた。 ・書画カメラ等で、ノートを投影して学級で考えを共有したり、つまづきのある児童を集めてヒントを与えて解き方を考えさせたりした。その結果、自分の考えに自信をもち、意欲的に発表できる児童が増えてきた。
6	国語	【調】新宿区学力定着度調査では、全体的に目標値を上回っている。しかし、「言葉の学習」や、「文章を書く」の学習は目標値を下回った。 【学】自分の考えを一定の分量でまとめて書いたり、気持ちや状態について表現するための語彙が乏しかったりするため、毎回同じような作文になってしまう児童がいる。	・文字数や長さを指定された長い文章を書くことができるようにする必要がある。 ・文意を理解することはできるが、学年相応の語彙の獲得が十分でない児童が多く、作文で用いて表現を工夫することが難しいため、指導が必要である。	・様々な表現の言葉を提示し、それらを用いて文章を書く活動を取り入れていく。 ・友達と作文を読み合い、多様な表現に触れるような学習活動を取り入れることで、自分の作文に活かしていけるようにする。	・文章を書く活動に対して、意欲的に取り組む児童が増え、課題に合った文章の量を書き上げることができた。しかし、同じ言葉を重複して使う児童が多いため、語彙の獲得に関する指導は引き続き行う。 ・友達と作文を読み合い、多様な表現に触れる指導を行った。まだ自分の作文に活かすことでできていないため、語彙の使用に関する指導を行っていく。	・文章の構成を意識しながら書こうとする児童は増えた。約6割の児童が「はじめ、中、終わり」の構成を意識して文章を書くことができた。 ・友達の作文を読むことで、自分の作文に活かす児童が増えてきた。国語の時間だけではなく、他教科においても語彙の使用に関する指導を行った結果、児童の語彙の獲得につながった。
	算数	【調】全領域において目標値を上回った。領域別正答率でみると、「整数のなかま分け」、「小数のかけ算・わり算」、「合同」、「図形の角」については、区平均を下回った。 【学】基本的な計算技能は身に付いているが、検算をするなどの丁寧さや、複雑な課題に直面すると、最後まで粘り強く取り組むことが難しい児童がいる。	・三角定規や分度器、コンパスといった用具を用いて図形を描けるように指導していく必要がある。 ・演算処理や習熟度に応じた指導をしていく必要がある。	・自力解決の時間を十分に確保し、課題に対して丁寧に取り組めるように指導する。その後、I C T機器を活用したり、友達と作図の過程を説明し合ったりする活動を通して学習内容の理解を深めるような授業を展開する。 ・習熟度に応じた課題に児童一人ひとりが向き合えるようにし、朝学習や放課後の時間にもデジタルドリルや東京ベーシック・ドリルを活用しながら、思考力を高める指導を行っていく。	・単位時間の課題の明確にしたことで、見通しをもちながら課題解決を行えるようになってきた。デジタル教科書などのI C T機器を使用することで友達と作図の過程を説明し合う活動がより分かりやすくなり、学習内容の理解が深まった。 ・朝学習や放課後の時間にデジタルドリルや東京ベーシック・ドリルを活用したことで、児童一人ひとりが自分の課題に応じて取り組んでいる。	・算数で見通しをもちながら課題解決を行ったことで、他教科でも見通しをもちながら学習する児童が増えてきた。 ・デジタルドリルを、家庭学習や授業で取り組ませた。全体としての定着ができていない単元を家庭学習で取り組ませた結果、算数に苦手意識をもっている児童の理解度も高まった。

音楽	学音楽活動に対して、概ね意欲的に取り組んでいる。新出事項への興味関心も高い。 学歌唱や器楽演奏など表現することは好きだが、曲想の変化に気付いたり、進んで表現を工夫したりするまでは至っていない児童もいる。	・コロナ禍のため、リコーダーや鍵盤ハーモニカの演奏経験が少ないため、指導方法の工夫が必要である。 ・曲想と音楽の構造の関わりに気付き、音楽を聴いたり、音楽をつくったり、表現を工夫したりする力を伸ばす必要がある。	・感染防止対策をしながら、リコーダーや鍵盤ハーモニカの学習にも取り組み、器楽演奏の幅を広げていく。 ・音楽ワークを活用しながら、知識を定着させるとともに鑑賞の活動を充実させ、自分たちの表現に生かすことができるようにする。	・感染防止対策をしながらリコーダーや、鍵盤ハーモニカに代えてのキーボードなどの学習に意欲的に取り組んでおり、器楽演奏の技能が高まってきた。さらに、歌唱も活動も機会が増え、表現の幅が広がってきた。 ・鑑賞の活動を充実させ、自分たちの表現と結び付けて考えるよう促すことで、主体的に表現を工夫しようとする児童が増えてきた。	・2年生のキーボードの演奏技能や、3・4年生のリコーダー演奏技能は、曲集や教科書を活用して意欲的に取り組んだ成果が出て、高まってきた。様々な楽器にも取り組み、合わせて演奏する楽しさを味わうとともに、さらに自分の技能を高めていこうとする意欲にもつなげることができた。さらにワークを活用するなどして音符や記号などについての知識も学年相応に身についてきた。歌唱については発声に必要な体づくりなど、基礎から引き続き指導していく必要がある。 ・鑑賞の活動を充実させることで、音楽を形づくっている要素と表現の工夫とを結び付けて考えることができてきた（弾んだ気分になるのはスタッカートがついているから、など）。 ・3年生以上は琴の体験も行い、伝統音楽の良さを味わわせることができた。
図工	学課題には、前向きに取り組んでいる。制作途中の作品を中断し、新たな材料でやり直しをしようしたり、失敗を気にしたりして、課題に向きえない様子も見られる。 学自他の表現を受け入れながら、他者の気持ちを考えたり、思いを伝え合ったりして、つくる楽しさを味わう経験が、まだ浅い様子も見られる。	・自分の感覚や行為から、形や色で表し、見方や考え方を広げ、新たな価値を柔軟に創り出していくことの良さを実感させる必要がある。 ・コロナ禍での感染防止策をとりながら、可能な限り、児童同士の関わり合いを深める造形活動を取り入れ、児童の主体性や寛容性を育む必要がある。	・活動の過程で、新たな視点がもてるように、材料との関わりを更に深めたり、お互いの作品を見合う場を適宜取り入れたりし、いろいろな表現を認め合う態度を育成する。 ・造形活動を通して、譲り合うことや他者の気持ちを考えながら制作することで、みんなが気持ちよく取り組めることを伝える。いろいろな表し方ができる雰囲気大切にしながら、創り出す楽しさを実感できる題材の工夫をする。	・児童の活動の過程を引き続き観察するとともに、振り返りの場も適宜設定するようにし、個々の活動に価値づけをしていく。 ・引き続き、譲り合うことや他者の気持ちを考えながら制作することで、みんなが気持ちよく取り組めることを伝える。課題から児童が見付けた表したいことを支援できるように、個々の思いに合う材料や用具、方法などの提案をし、発想や構想が広がる手立てとする。	・キャリアパスポートを活用し、各学年に振り返りの場を設定した。児童の振り返りの言葉からも、展覧会を通した鑑賞で、自分の作品のよさや他者の作品のよさなどを感じ取っていることが分かった。 ・振り返りの言葉から、共同作品の取り組みが、児童同士の一体感をもたせる契機となったことが分かった。また、協力することの大切さや、時には、意見が合わないこともあるが、譲り合うことの大切さを、活動を通して実感している児童の姿が見られた。今後も個々の思いに寄り添う個別最適な指導を継続していく。
友 特					

調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況

学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト、デジタルドリル等から見える学習の状況

※分量は2 ページ以上となってもよい。